建築倫理教材「先達に聞く」の制作

小野田泰明（日本建築学会長/東北大学）
岡本　達雄（日本建築学会 倫理委員会 委員長/クレアティオワークス）
増田　幸宏（日本建築学会 倫理委員会 建築倫理教材開発 WG 主査/芝浦工業大学）

1．制作の目的と経緯

日本建築学会では、1999 年に倫理綱領・行動規範を策定し、その後 2004 年に倫理委員会が発足した。日本建築学会の会員は、倫理綱領を基本理念として共有し、行動規範に基づく判断・行動を実践することが求められている。このため、日本建築学会倫理委員会では、会員が倫理的判断や行動を実践する際の参考となる教材・資料を作成し、これらをセミナー等の広報活動を通じて提供してきた。こうした取り組みの一環として、日本建築学会の先達に建築倫理について話を伺う「先達に聞く」の企画を立ち上げ、動画教材の作成を進めている。これまでに、建築構法・生産分野の内田祥哉先生（東京大学）、建築構造分野の斎藤公男先生（日本大学）、建築環境・設備分野の木村建一先生（早稲田大学）へのインタビューを実施し、その内容を動画として編集・制作し、倫理教材として会員に提供している。このたび第 4 弾となる「先達に聞く」動画は、建築計画分野で活躍され建築設計者教育に尽力された岡﨑甚幸先生（武庫川女子大学教授 / 京都大学名誉教授）へインタビューを行い、その記録を 35 分程度の教材動画として編集した。制作した動画は、日本建築学会倫理委員会のホームページから公開を予定している。

２．動画制作の概要およびスケジュール

①インタビュー対象：岡﨑甚幸先生（武庫川女子大学教授 / 京都大学名誉教授）
②インタビュー実施日時・場所：2025 年 11 月 29 日（土）　武庫川女子大学建築学部（甲子園会館）、動画編集：2025 年 12 月～2026 年 3 月
ホームページ（URL: https://rinri.aij.or.jp/e-learning-1.html）への公開予定：2026 年 4 月
③インタビュー参加者
　岡本達雄（日本建築学会倫理委員会委員長/クレアティオワークス代表）
　石川孝重（日本建築学会倫理委員会委員/日本女子大学名誉教授）
　増田幸宏（日本建築学会倫理委員会委員/芝浦工業大学教授）
④インタビュー概要：インタビューの中で岡﨑先生が語られた項目を以下に示す。
・建築との出会い
・アメリカ留学の経験
・建築家の職能（建築家のために必要な建築教育）
・武庫川女子大学における建築家のための建築教育の特徴
・真善美と強用美の関係について
・倫理と自然
・個人の倫理と集団の倫理（京町屋の倫理）
・今後の建築の倫理とは？
・若い世代へのメッセージ

３．動画の構成

本動画は、岡﨑甚幸氏の思想と実践を通じて、建築教育や建築倫理、自然観、強用美と真善美、個人と集団の倫理等の本質を多角的に探る内容である。舞台となるのは、兵庫県西宮市の武庫川女子大学上甲子園キャンパスに位置する甲子園会館であり、これは遠藤新設計により旧甲子園ホテルとして建築されたものである。Frank Lloyd Wright の系譜に連なる歴史的建築であり、文化財としての重みを背景に、建築倫理を語る象徴的な場となっている。動画は 5 つの Chapter と質疑応答、付録映像（インタビュー当日に行われた学生による甲子園会館のライトアップ映像）で構成されている。

Chapter1 建築家の職能 -建築家のために真に必要な建築教育

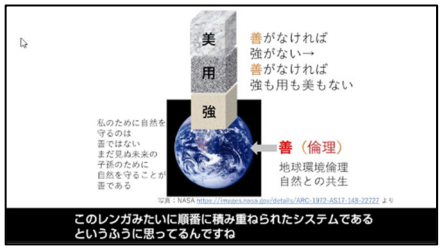
Chapter2 武庫川女子大学における建築家のための建築教育の特徴

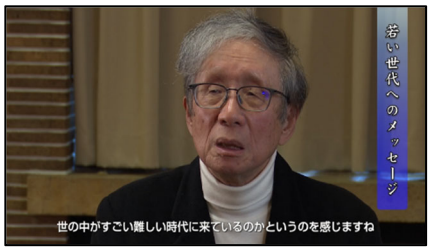
Chapter3　強用美と真善美

Chapter4　倫理と自然

Chapter5　個人の倫理と集団の倫理-京町家の倫理

質疑応答





動画教材イメージ（抜粋）

４．動画の概要

本動画では、岡﨑氏の建築との出会いとして、高校時代に桂離宮の美に感銘を受けた経験が紹介される。大学で学んだ後、海外への留学により、多国籍環境での議論や教育体制の違いに触れ、日本の建築教育を見直す契機となった。以後、「建築家をいかに育成するか」を一貫したテーマとし、建築を都市や自然との関係の中で捉える広い視点の教育を重視してきた。日本の建築教育は、建築・構造・環境を統合的に学ぶ体系や、設計と施工の一体性に特徴があり、実務経験を重視した少人数スタジオ教育の重要性が指摘される。武庫川女子大学では甲子園会館を活用した修復実習や充実した制作環境により、実践的教育が行われている。また、建築倫理として「強・用・美」に加え、日本的思想としての「善」を含む枠組みや、自然との共生という価値観が論じられる。京町家の事例では、隣接関係や景観維持にみられる集団的倫理の重要性が示され、建築が社会関係の中で成立する存在であることが強調される。さらに、AI の進展に対しては、人間の直観や個性の重要性が指摘され、建築における独自性の価値が再確認される。若い世代に対しては、複雑な社会課題に向き合いながら倫理的判断を伴う建築に主体的に取り組む姿勢が求められる。全体として、建築は倫理・自然・文化・社会を統合する営みであり、建築家には責任ある判断力とアイデンティティが不可欠であることが示されている。

謝辞：最後になりますが、「令和 7 年度 建築技術の調査研究又は普及活動を応援する助成」のご支援に厚く御礼申し上げます。